



是澤 紀子 研究室
Noriko Koresawa Lab.

Profile

1995 名古屋工業大学社会開発工学科建築学コース卒業
2001 東京藝術大学大学院博士前期課程修了
2006 名古屋工業大学大学院博士後期課程修了
2006 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 教育研究助手
2007 名古屋工業大学大学院工学研究科 准教授
2015 授日本女子大学家政学部住居学科 准教授

Works

著書等
2012 『建築遺産 保存と再生の思考・災害・空間・歴史』東北大学出版会（共著編）
2015 『日本風景史』昭和堂（共著）
論文
2014 「近世初期三輪山における禁足の制定とその景観・神社の禁足地とその景観に関する研究」日本建築学会計画系論文集700
2015 「歴史まちづくりに関する文化資源の価値と保存再生」都市計画64（2）

「土地の文脈を生かした保存・再生」

文化財保存学と都市・建築史学を両輪に、今日までの歴史的な都市・建築とそこでの居住環境を読み解くことで、土地の文脈を生かした保存・再生につなげることを目指して研究を行っています。現場には、文献資料だけでは得られない多くの発見があります。そのような現存するモノと環境が語る文脈を読み解くことを大切にしています。



寺社と周辺環境が織り成す景観

寺社を中心として、周辺環境から境内、建築の細部装飾へと、それぞれのスケールでみた意匠とその意味に関する研究や、そこでの自然環境や文化などに着目し、歴史的かつ生態学的枠組みから保存・再生のための指標を探る研究をしています。とくに中世後期から近世にかけて、装飾が発展してゆく神社本殿とその景観を対象に、信仰とともに人々が神社に求めた建築や景観と、そこでの意匠的特質について解明することに最大の関心をもって取り組んでいます。そのために、建築史学にくわえて、建築環境学、歴史地理学、民俗学などの多岐にわたる分野を視野に入れることによって、寺社と周辺環境を含めた一体的な景観としての過去の文脈を捉えています。さらに、そうした多岐にわたる学問分野と、現代における環境保全学や保存修復学、保存行政との融合を目指して、建築や景観を包括的に捉えることができるよう、研究領域の拡大を試みています。

写真：川原宮舘神本社本殿（愛知）



都市遺産としての歴史的建造物の景観

これまでの都市・建築文化に蓄積された技術や思想をこれからのデザインに生かすための研究に取り組んでいます。保存は創造の一側面であり、過去の履歴を評価して創り上げていくデザイン力が問われます。それは、個々の歴史的な建造物を対象として、保存・再生をどのように実現するのかに留まらず、それらが都市の遺産としてどのような価値があり、また、それらが集積した歴史的な景観をどのように継承することができるのかを総合的に考えていくことが、これからの歴史まちづくりを実現する上でとても重要です。そのために、<見えるもの>の背景にある<見えないもの>——自然の働きや文化の影響、人間生活の変化を捉えることによって、住環境がもつストックの保存再生からまちづくりへと繋げていくことを目指しています。愛知県一宮市起や名古屋市有松、東京都台東区谷中など、全国各地にある伝統的建造物群保存地区や、歴史まちづくりに取り組む地域を対象として展開しています。

写真：重要伝統的建造物群保存地区に選定された有松の町並み



歴史的建造物の保存・再生手法

歴史的建造物の調査研究や保存・再生に向けた実践的な活動に取り組んでいます。たとえば東日本大震災で被災した登録有形文化財「世嬉の一酒造場」（岩手県一関市）の保存再生の支援や、重要文化財「東北学院旧宣教師館」（宮城県仙台市）では文化財として価値評価するための調査などを展開してきました。「東北学院旧宣教師館」では近年シンポジウムが開催され、近代建築とその塗装の実態に関する継続調査の成果は2021年春より東北学院のホームページでも紹介されています。本学では成瀬記念館分館の移築修理工事が完了し、2018年度には成瀬記念講堂の耐震補強工事が完了しました。これらは今もなお現存する歴史的建造物から、保存・再生の手法を研究する貴重な機会を提供してくれています。

写真：成瀬記念館分館移築修理工事を説明する研究室学生の様子

主な卒業論文・修士論文

- 卒業論文：「新薬師寺本堂にみる明治時代の保存修理に関する研究—明治材と転用材に着目をして—」 釜田 みゆう 2021年度
- 「重伝建選定における保存対策再調査に関する研究」 日下 夏稀 2021年度
- 「NIPPONIA宿泊施設の機能と分布傾向に関する研究—重伝建と非重伝建地区を比較して—」 中島 沙羅 2021年度
- 修士論文：「鎮守社としての東大寺八幡宮の特質に関する研究」 横山 ともみ 2020年度
- 「大崎八幡宮の造営に関する研究—絵師と工匠の動きにみる背景について—」 生田 真菜 2020年度

研究室の雰囲気を表す一言：対象を深く掘り下げてコツコツと積み上げる

是澤研究室

是澤研究室では、学部生と院生が一同に会してゼミを行っています。研究テーマは神社、寺院、民家、茶室、古建築の保存修理方法、文化財の制度など、対象とする時代も様々で多岐にわたっています。知的好奇心のままに行う意見交換がお互いの研究に刺激を与え合うような環境づくりをしています。また、学生主体の自主ゼミを開催したり、建築学会大会で論文を発表したりするなど真剣に研究と向き合える風土があります。研究は文献史料のほか、対象の見学やヒアリング調査など、足を頼りにした現物との対話も大事にしています。本年度は奈良県生駒郡三郷町にある勢野八幡神社にて、本殿及び境内内の小社殿の形式及び意匠調査、並びに一部部材の実測を実施しました。



（松山 奈穂）

2021年度の卒業論文



集落の寺社分布にみる景観特性—旧磐城郡を対象として—

藍原 瑞希

卒業論文

集落の成り立ちを知ることによって、これからの集落の在り方を模索することを目的とした研究。集落の成立過程を分析するため、古来より集落の機能的・文化的側面を担ってきた寺社に着目し、その分布状況と自然環境や祭り、街道等の多要素との比較によって、集落の形成過程と集落景観の構成要素について分析した。結果、生業と文化的要素の関連性や、街道と集落の推移の状況が、寺社の分布によって可視化されている点を指摘した。

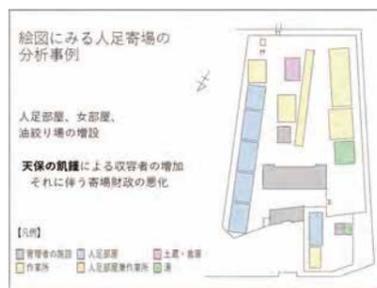


古絵図の甚目寺境内にみる近世化に関する研究

佐藤 晶

卒業論文

本研究では、江戸期には庶民信仰を獲得していた地方寺院である愛知県甚目寺に着目し、境内構成の変遷を明らかにした上で、境内の近世化について考察することを目的とした。古絵図や文献資料等からの調査の結果、江戸中期には開帳の際に茶屋や見世物小屋などの遊興目的の仮設的な建築が境内に現れ、江戸末期には茶屋が境内に常設され、寺院が庶民に開かれていく変化が見出せた。更に、江戸期の古絵図を比較した結果、江戸期において周辺の水路が衰退していった可能性について指摘した。

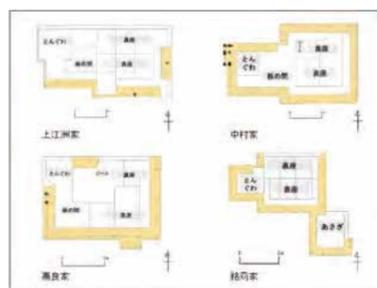


石川島人足寄場の更生施設としての変遷と特徴—伝馬町牢屋敷との比較—

戸田 南帆

卒業論文

人足寄場とは、江戸時代、無宿人や受刑者に手作業をさせ更生を図った施設であり、我が国における近代的自由刑の源流として注目されてきた。人足寄場については法制史の分野で多くの研究があるが、拘禁施設としての特徴は未解明な点がある。また、人足寄場は未決拘禁の場から更生施設への牢制の転換という点で重要視されているが、その転換における建物の変化について着目した研究は少ない。本研究では、人足寄場の建物の変遷について整理することで、その施設構成が当時の社会状況に伴って変化したことを指摘した。また、伝馬町牢屋敷の施設構造との比較から、人足寄場は牢屋敷に比べ強い監視・管理体制はなく、更生施設として人道的な配慮がされていた可能性が窺えた。



沖縄の民家における雨端に関する考察

原田 玲奈

卒業論文

雨端とは沖縄の伝統的な民家によく見られる軒に深く差し出した庇とその下の軒下空間のことである。先行研究では、雨端は強い風雨や直射日光を遮る重要な役割を担っており、内部空間と外部空間を繋げる半戸外空間として言及する研究はあるものの、雨端に特化した研究はされていない。そこで本研究では沖縄の民家の中で修理工事報告書が刊行されている上江洲家、中村家、高良家、銘苅家の主屋4棟に焦点をあて、平面・断面のそれぞれの視点から雨端の特性について考察を行なった。本研究において雨端は狭い室内空間を広げるために必要な空間であり、方位によって幅に差異が見られ、南面と東面を中心に拡張していく傾向にあることがわかった。